

I. ホスピス緩和ケアを支えるボランティア活動

13. 在宅ホスピスボランティア養成講座

—ふくおか在宅ホスピスをすすめる会の取り組み—

二ノ坂 保喜^{*1,2} 平野 頼子^{*1,3}

(ふくおか在宅ホスピスをすすめる会^{*1} にのさかクリニック^{*2} 訪問看護ステーションはな^{*3})

『在宅ホスピスガイドブック』から

在宅ホスピスに日々、関わるなかで患者、家族への情報の少なさを感じてきた。実際にどうすれば在宅療養が可能になるのか、最期まで家で過ごすことができるのか、在宅医療についての情報が得られないことや介護力不足など、さまざまな問題で実現できずにいる方が多い。福岡県内で在宅ホスピスに取り組んでいる医師や訪問看護師、ボランティアの会の仲間たちに声をかけ、県内の在宅療養支援診療所や訪問看護ステーション・緩和ケア病棟にアンケート調査を行い、自分の住んでいる地域に往診医や24時間対応の訪問看護ステーションがあるのか、緩和ケア病棟があるのか、費用はどれぐらいかかるのか、など終末期医療の情報を一般の方にもわかりやすくまとめた『ふくおか在宅ホスピスガイドブック』(図1)が完成した(2007年)。メンバーはそれぞれに多忙を極めており、ガイドブックができるまでに2年あまりを費やしたが、在宅ホスピスに対する熱い



図1 ふくおか在宅ホスピスガイドブック

思いは「ふくおか在宅ホスピスをすすめる会」の発足に繋がり、次の課題に取り組むことになった。

在宅での看取りを希望しても家族の介護力だけでは支えきれないケースも多く、介護保険などのフォーマルなサービスに加えてボランティアの力の必要性を強く感じてきた。欧米では、在宅ホスピスを支える大切な一員としてボランティアの役割は認識されている。しかし、わが国においてはきちんとした教育システムすらない状況があり、これからの在宅医療を支えるためには在宅ホスピスボランティアの養成が必須と考えた。

在宅ホスピスボランティア養成講座 開講まで

福岡県では2005年度より行政、医療関係者、コメディカルをメンバーとして「福岡県終末期医療対策協議会」を発足させ(在宅ホスピスをすすめる会の世話人も協議会のメンバーとして参加)、患者が望む終末期医療の体制を築くために何が必要か、情報交換や研修会を開いて検討がなされていた。2007年の福岡県NPO提案活用事業の募集に、本会が提案した「在宅ホスピスボランティアの養成と啓蒙活動」が県担当者の目に留まった(図2)。そして、在宅ケア支援ネットワークの構築のためにはぜひ必要な事業と取り上げられ、県と協働して「在宅ホスピスボランティア養成講座」を行うことになった。

県の委託事業であるため、講座運営の費用は委託料で賄うことができ、受講料も無料とすること

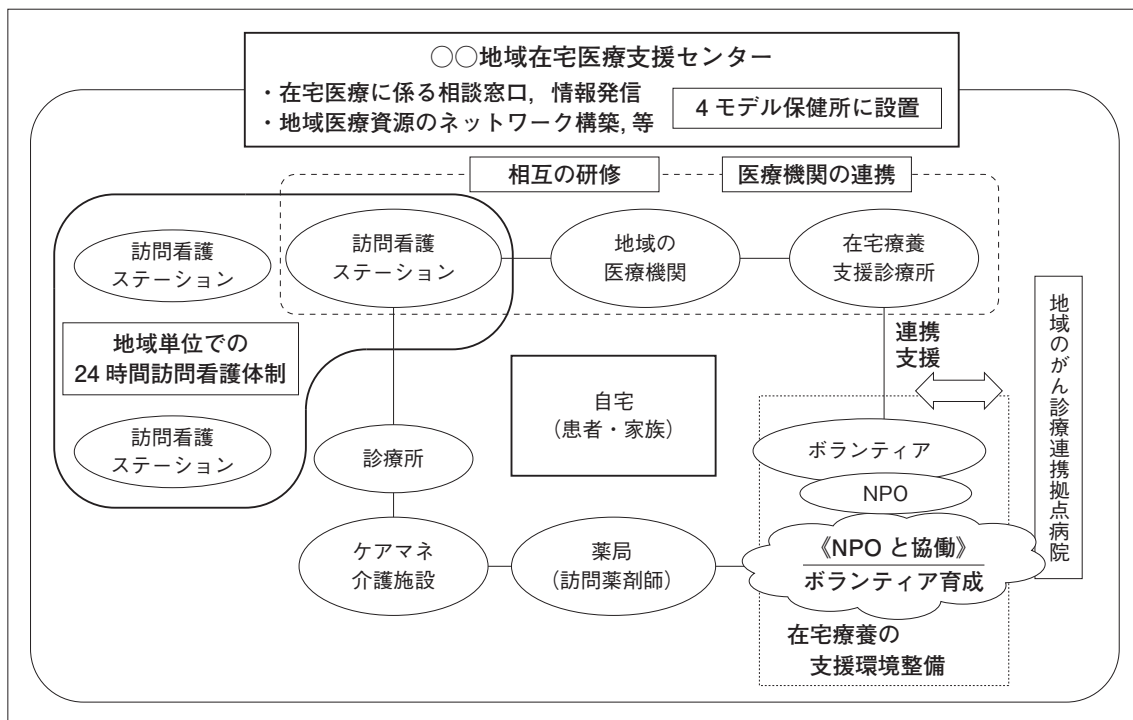


図2 福岡県の在宅医療推進事業の取り組み (2008年度)
NPO との協働で、ボランティア育成を位置づけている。

ができた。講座の内容や、開催期間、開催場所、実際にかかる費用など県の担当者を交えて何度も話し合い、検討した。すでに在宅ホスピスボランティアを活用しているグループの話も参考にした。

研修内容については、終末期の患者・家族に接する際に知識として身につけてもらいたい終末期の患者の状態や症状緩和、家族支援や介護のこと、コミュニケーションの実際、ボランティア活動に関する法律の話、ボランティアの役割および実際の活動の話、介護実習、緩和ケア病棟や在宅の現場での研修を盛り込んだ。

無理のない時間を考慮して1講座90分とし、1日2講座で構成、月に2回程度で開催することにした。講師は、在宅の現場で頑張っている経験豊富な医師や看護師、緩和ケア病棟でボランティアとして長年活動している本会のメンバーの力を有効に活用することにした。法律やコミュニケーション、介護実習の分野は会のメンバーの紹介で第一線で活躍している弁護士、臨床心理の専門家の大学教授やホスピスカアに精通している精神科

医、理学療法士や作業療法士の協力を得ることができ、贅沢すぎるほどの講師布陣となった(講座の内容、スケジュールは表1参照)。

講座受講者募集にあたって

第1回(2007年度)は本会のメンバーが活動する福岡市(福岡会場)、行橋市(北九州会場)、久留米市(久留米会場)で講座を開催することになり、在宅での看取りを経験された遺族の方や、地域のボランティアグループ、社会福祉協議会などに講座の案内チラシを配布した。福岡県も新聞、ラジオの県政便りなどの広報を通じて案内を行った。受講定員は3地域で100名を予定していたが、表2の通り応募が定員をはるかに超え、人々の在宅ホスピスに関する関心の高さが伺えた。特に、「自分の体験を役に立てたい」「お世話になったので、今度はお返しをしたい」との思いで応募された遺族の方も多かった。

受講者選定に当たっては、受講申込用紙に年齢、職業、ボランティア経験の有無のほかには受講

表1 在宅ホスピスボランティア養成講座カリキュラム (2009年10月より)

回	時間割	時間 (分)	テーマ	〈福岡会場〉 ふくふくプラザ 201会議室 介護実習室 13:30~16:30	〈北九州会場〉 小倉記念病院 講堂 13:00~16:00	〈久留米会場〉 (1)えーるピア (2)久留米市役 所 (3)ふじの郷 14:00~17:00	〈飯塚会場〉 松口循環器内科 麻生飯塚看護学 校 14:00~17:00
第1回	1時間目	90	在宅ホスピスとは 在宅ホスピスチームケアについて	10/4(日) 二ノ坂保喜	10/17(土) 矢津 剛	(1)10/18(日) 齋藤 如由	10/10(土) 松口 武行
	2時間目	90	ホスピスボランティアについて	深堀 邦枝	深堀 邦枝	江島久美子	深堀 邦枝
第2回	1時間目	90	症状と薬の理解	10/11(日) 原口 勝	11/7(土) 大場 秀夫	(2)11/8(日) 齋藤 如由	10/24(土) 広門 裕子
	2時間目	90	終末期の介護・家族支援	平野 頼子	重見多美子	小野 幸代	平野 頼子
第3回	1時間目	90	コミュニケーションのとり方	11/1(日) 野島 一彦	11/14(土) 三木 浩司	(1)11/15(日) 三木 浩司	12/5(土) 三木 浩司
	2時間目	90	精神的支援(傾聴の仕方)、実習				
第4回	1時間目	90	ホスピスボランティア活動の実際	11/22(日) 神谷 佳子	12/5(土) 深堀 邦枝	(2)12/6(日) 深堀 邦枝	11/21(土) 五十嵐純子
	2時間目	90	ボランティア活動と法律	小林 洋二	加藤 哲夫	小林 洋二	小林 洋二
第5回	1時間目	180	介護実習	12/5(土) 荻 真由美 福田 満子・ 森山 大志	12/12(土) 岩永 美智子 野田 喜寛	(3)12/20(日) 荒巻 初子 宮本 信	12/12(土) 海尾美年子
1月~2月			現場研修 (緩和ケア病棟や在宅で少人数ず つ研修します)	二ノ坂保喜 原口 勝	矢津 剛 (ひと息の村)	齋藤 如由	松口 武行
3月			フォーラム				

表2 在宅ホスピスボランティア養成講座の活動状況

	2007年度				2008年度					2009年度				
	北九州	久留米	福岡	合計	北九州	久留米	福岡	飯塚	合計	北九州	久留米	福岡	飯塚	合計
応募者数	42	30	52	124	19	31	37	22	109	52	36	52	15	155
受講者数	35	30	42	107	19	31	32	22	104	52	25	41	15	133
修了生数	17	17	30	64	11	30	26	18	85					
ボランティア登録数	7	17	19	43	6	34	17	10	67					
ボランティア実働数	3	9	3	15	5	15	10	5	35					

動機をかならず記入してもらうようにし、その動機を参考に選定した。希望者全員に受講してもらったかどうかとの意見もあったが、この講座は在宅で実際に活動できるボランティアの養成を目的にしており、単に自分の知識のためにと申し込んだ方はお断りした。

2年目（2008年度）は3会場に加えて福岡県全体の広い地域でという強い要望もあり、筑豊地区飯塚会場でも開講することになった。筑豊地区はホスピスガイドブックを作ったときに在宅医、訪問看護ステーションが少なく、県内でも在宅ホスピス実践の空白地域であることがわかっていたので実現できるかが危ぶまれた。しかし、幸いに在宅医療に関心を持つ開業医と出会い、講座開催を引き受けてもらうことになった。この会場でも20名の定員に対して定員を超える応募があり、どの地域にあっても終末期医療に対するの思いはみな同じであることを改めて感じた。この講座をきっかけに空白地域といわれた筑豊地区にも新しい風が吹き込んだように思う。

講座開始に当たっては、受講者全員に「個人情報に関する誓約書」を提出してもらった。これは講義や現場実習のときに患者・家族の情報を知らぬことに配慮して作成した。

全講座修了者には修了書と本会が制作したボランティア手帳を渡している（図3）。やむをえない事情により欠席する方のために各会場の日程をずらして、同じ内容の講座を他の会場で受講できるように工夫した。また、未修の講座が発生し、修了書がもらえなかった方も次年度に未修講座を



図3 在宅ホスピスボランティア養成講座テキストとボランティア手帳

受講してもらい、修了書を渡している。

養成講座の成果

「在宅ホスピス」という言葉を初めて耳にする受講生も多く、ホスピスの歴史や終末期にある患者の状態、麻薬などの鎮痛薬に対する正しい知識など日頃接することのない話を、緊張しながらも熱心に受講していた。コミュニケーションの講義では講師の話だけではなく、受講者同士でロールプレイの実習もあり、実際のコミュニケーションのとり方を勉強してもらった。ボランティアの役割についての講義では、グループワークを通じて受講者同士のコミュニケーションづくりができた。

現場研修においては、各地域の緩和ケア病棟、および在宅医の診療所や訪問看護ステーションを中心に在宅で過ごす患者宅に協力をお願いして実地での研修を行った。半年間の講座終了時には、受講生の表情にも在宅ホスピスに対する熱い思いが感じられ、有意義な講座になったと考える。

終了後のボランティア活動について

養成講座終了後のボランティア活動の拠点をどうするかが問題となったが、北九州会場と福岡会場の受講者はすでにボランティア活動を行っているボランティアのグループをお願いした。久留米会場は、第1回の卒業生の中から「結いの会」というボランティアグループができ、活動を開始した。実際のボランティア活動に際してはそれぞれの会に登録してもらい、在宅医、訪問看護ステーションなど在宅ケアのチームの一員として活動することを原則とした。

まだ十分とはいえないが、ターミナル期にある患者宅に訪問して家族が買い物などで外出するときの見守りを引き受けたり、話し相手などの精神的支援を行ったりと活動している。

「在宅ホスピスを語る会」について

「ふくおか在宅ホスピスをすすめる会」では、

前述の『在宅ホスピスガイドブック』, 「ボランティア養成講座」とともに, 「在宅ホスピスを語る会」を開催している。これは, 一般市民への在宅ホスピスの啓蒙や講座修了記念もかねて各地域で行う。在宅ホスピスを経験した遺族の方, 関わった医療や福祉関係者から, それぞれの思いや悩みを率直に出してもらい, 一般の方に在宅ホスピスを知ってもらうことを目的としている。

これまでに, 行橋, 久留米, 福岡で行ってきたが, 2008年3月には, 福岡のアクロス福岡国際会議場で「福岡の在宅ホスピスケアの現状とこれから」をテーマにフォーラムとして開催した。福岡県からも行政としての在宅ホスピスケア(終末ケア)への取り組みと現状について報告してもらった。280名の参加があり, この講座が行政と一体となって行っていることを一般の方にもアピールできたと考える。

これらの活動の成果を得て, 「福岡県在宅推進事業」にはボランティア養成がしっかりと組み込まれている。このように, 行政と協働して県内各地で連携して, 同じ内容で開催される在宅ホスピ

スボランティア養成講座は全国でも初めての試みではないだろうか。

今後の課題について

在宅ケアを進めていくうえで, 今後ますますボランティアの力が必要になってくると考える。しかし, 現状ではまだまだ育成, 受け入れなどに問題が多い。緩和ケア病棟と違って, 共通の場をもたないため, ボランティアが1人での判断, 責任を負わざるをえないこと, 事故やトラブルにどう対処するかといった問題, ボランティアとスタッフとの間の情報の交換・共有をどうやって行うか, あるいは在宅ホスピスの理念共有をどのようなプロセスで行うべきかなど, 課題は山積している。

在宅ホスピスが, 患者と家族のいのちと生活を最後まで支え, より豊かなものができるよう患者, 家族を含めて在宅ケアに関わる関係者, 地域の住民で, ボランティアを育てていきたいものである。